

メッセージアウトライン

創世記27:42～28:22「ヤコブの旅立ち」

弟のヤコブが父からの祝福を横取りしたことで兄のエサウは殺意を抱き、父の喪の日（死ぬ日）が近づいているので、その日にヤコブを殺してやろうと決意する。(41)

[42-46] しかし、そのことは母親のリベカに伝えられる。(42) これは彼らの家に仕えるしもべたちによって伝えられたのであろう。このようなことからイサクの家庭の中の対立がそのしもべたちをも巻き込んでいたと考えられる。兄弟たちの問題だけではなく、その家族、一族全体の問題にまで発展していたのである。エサウの決意を聞いた母リベカはヤコブを呼び寄せて、彼女の兄ラバンのところへ逃げることを勧める。これはエサウの憤りが収まるまでの一時的な逃避であって、ほとぼりが冷めたら、またヤコブを呼び戻すという考えであった。(43-45)「あなたたち二人を一日のうちに失うことなど、どうして私にできるでしょう」(45)とは、もしエサウがヤコブを殺せばエサウもまた弟殺しの罪に問われ、さばきを受けて殺されるという意味であろう。エサウもヤコブもリベカの子であることに変わりはない。それでリベカは夫イサクに提案する。「私はヒッタイト人の娘たちのことで、生きているのがいやになりました。もしヤコブが、この地の娘たちのうちで、このようなヒッタイト人の娘たちのうちから妻を迎えたとしたら、私は何のために生きることになるのでしょうか」(46)すでにエサウはカナンの地の先住民のひとつであるヒッタイト人の中から二人も妻をめぐっており、彼女たちはイサクとリベカにとって悩みの種となっていた。→26:34-35 彼女たちがカナンの地で盛んであった偶像礼拝や、よからぬ風習を持ち込んで来たということは容易に想像できる。神が契約を結ばれ、その信仰を義と認められたアブラハムの子孫である者として、こういったことはふさわしくないことであり、避けるべきことであった。しかし、俗的で霊的なことに関心を寄せないエサウはそんなことを何も考えずに地元の娘たちと結婚してしまったのであった。そもそもイサクも父アブラハムの命によりアブラハムの出身地メソポタミアのハランの地からリベカをめぐったのであった。→24章

ヤコブがカナンの地の娘と結婚するようになればまた新しい問題が増えて、誰よりもイサクが困ることをリベカはよく知っていた。それでヤコブの妻捜しを理由としてリベカはヤコブをエサウから離そうとしたのである。

[28:1-4]「イサクはヤコブを呼び寄せ、彼を祝福し、そして彼に命じた。『カナンの娘たちの中から妻を迎えてはならない。さあ立って、パダン・アラムの、おまえの母の父ベトエルの家に行き、そこで母の兄ラバンの娘たちの中から妻を迎えなさい。全能の神がおまえを祝福し、多くの子を与え、おまえを増やしてくださるよう。そして、おまえが多くの民の群れとなるように。神はアブラハムの祝福をおまえに、すなわち、おまえと、おまえとともにいるおまえの子孫に与え、神がアブラハムに下さった地、おまえが今寄留しているこの地を継がせてくださるよう。』」

これは非常に具体的な指示である。妻リベカの親もとならば間違いないとイサクは思ったのであろうか。しかし、そのような判断の中にも神の導きがあったのだらう。「パダン・アラム」メソポタミア北西部、ハラン周辺の地。イサクは「全能の神がおまえを祝福し」と兄エサウよりもヤコブのほうが神に選ばれているということをはっきりと認めて祝福を与えている。「多くの子を与え、おまえを増やして下さるように。そして、おまえが多くの民の群れとなるように」このことばはやがて実現し、ヤコブの子孫は増え広がり、イスラエル民族となるのである。「…おまえが今寄留しているこの地を継がせて下さるように」この願いもやがて実現することとなる。

[5]「こうしてイサクはヤコブを送り出した。彼はパダン・アラムの、ラバンのところに行った。ヤコブとエサウの母リベカの兄、アラム人ベトエルの子ラバンのところである」

リベカはヤコブがしばらく兄ラバンのところに滞在しているうちに問題は解決すると考えたようである。しかし、このリベカの判断は甘かった。ヤコブはパダン・アラムから長い年月帰ることができず、リベカはもう二度とヤコブを見ることができなくなってしまふのである。

[6-8] 一方エサウは父イサクがヤコブにカナンの子供たちから妻をめぐってはならないと言ったこと、パダン・アラムへ行ってそこから妻をめぐるように祝福して彼を送り出したことを知った。(6-7)

「さらにエサウは、カナンの子供たちを、父イサクが気に入っていないことを知った」(8) エサウはここに至るまでこの問題に気づいていなかったなのであろう。彼は自分の考えを押し進めるタイプの人で、人情の機微や人の思いに気づくこと、霊的なことにうとい人物であったことがわかる。彼は母の気持ちなど全く考えていなかったのではないか。そして父イサクはエサウのほうを愛しながらも、彼がカナンの子供をめぐったことについては親としての権威を示して異議を唱えたとも思われぬ。エサウも全く父の気持ちに気づかなかった。このようにイサクもリベカもエサウもヤコブも皆いろいろな問題点、弱さを持った人々であったが、しかし、そのような人々を通して神のご計画は着々と進んで行くのである。

[9]「それでエサウはイシュマエルのところに行き、今いる妻たちのほかに、アブラハムの子イシュマエルの娘で、ネバヨテの妹マハラテを妻として迎えた」

イシュマエルは父イサクの腹違いの兄であり、アブラハムと女奴隷ハガルとの間に生まれた子であった。それでその娘であればカナンの子供とは確かに違うことになるが、それで問題が解決したことにはならない。ここにはなにか安易さを感じられる。ただ都合の悪いところを変えようとして表面的に次から次へと新たな手を打ち、本質的には何も変わっていない。自分の悪いところを悔い改めていない。そのようなエサウの姿を見るのである。

[10-11]「ヤコブはベエルシェバを出て、ハランへと向かった。彼はある場所にたどり着き、そこで一夜を明かすことにした。ちょうど日が沈んだからである。彼はその場所で

石を取って枕にし、その場所で横になった」

ハラシとパダン・アラムは同じ地域を指している。「ある場所にたどり着き」ベエルシェバから徒歩であるのでそんなに早く進むことはできない。ヤコブはその石の一つを取り、それを枕にして野宿することにした。この状態では野獣に襲われる可能性もある。身を守るものといえばただ杖一本だけである。(32:10) 彼は非常に心細かったであろう。

[12]「すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた」

ヤコブはこの夢を偶然に見たように思えるが、実はそこに神の働きがあったのである。これは神自らが天と地、神と人との隔たりをなくしてくださる。近づいてきてくださったということのしるしと思われる。「神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた」とは遊んでいるのではなく、これはまず、祈りを人間の側から神のもとに運び、そして神の側からの答えを人間にもたらすということを示していると思われる。私たち人間は気がつかなくても、神の使いたちはそのような働きをしているのかもしれない。

[13-15]「そして、見よ、主がその上に立って、こう言われた」はしごの上には主なる神が立っておられた。別訳では「主が彼のかたわらに立っておられた」言わんとすることは同じで、天であっても地であっても主は彼の祈りを聞き、しかも彼とともにいてくださるお方であるということである。これを神の遍在という。→詩篇139:7~10 しかし、この時にこのようにして特に現れてくださったのは、アブラハムやイサクの場合のように主が彼と契約を結ぶためであった。そのようにしてヤコブが祝福の契約の継承者であることが確認されるのである。そして主はここで七つの祝福を約束してくださった。これは基本的にはアブラハムの契約と同じであるが、具体的なことが付け加えられている。

①ヤコブが横たわっている地を彼と彼の子孫に与える。(13)

②彼の子孫は地のちりのように多くなる。(14)

③地のすべての部族(民族)は彼と彼の子孫によって祝福される。(14)

④主は彼とともにいてくださる。(15)

⑤主は彼がどこに行っても、彼を守り、この地に連れ帰る。(15)

⑥主は彼を決して捨てない。(15)

⑦主は彼に約束したことを必ず成し遂げてくださる。(15)

これらは全く一方的な主の恵みによってなされることである。ヤコブが特に優れているからとか、立派だからそのようにしてくださるというのではない。ヤコブはそれとは全く反対のずるい、うそつきの、利にさとい、自己中心的な人物なのである。それゆえ、これはあくまでも神の選びにもとづく一方的な御恩寵として与えられた祝福の約束なのである。

[16]「ヤコブは眠りからさめて言った。『まことに主はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。』」

これは家を離れ、今まで親しんできた礼拝の場所をも離れたこのようなところにも主がおられるのを知らなかったという意味で、予期しなかったところで主の臨在を知ったことの驚きがここに感じられる。

[17]「彼は恐れて言った。『この場所は、何と恐れ多いところだろう。ここは神の家にはかならない。ここは天の門だ。』」

「神の家」と「天の門」はほとんど同義語で、神の家は神の臨在される場所であり、それは祈りが神の御使いによって携え上げられていく天の門であり、また栄光に至る門なのである。

[18]「翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ」

これは神の現れを証しし、記念とするための行為である。「油を注いだ」とは聖いものとしたという意味。

[19]「そしてその場所の名をベテルと呼んだ。その町の名は、もともとはルズであった」「ベテル」…神の家の意。奇しくもそこはかつてアブラハムが主のみことばを信じてメソポタミアからカナンの地へ来た時に祭壇を築いた場所の近くであった。→創世記12:8

アブラハムの時代にすでにベテルという地名が出てきているのはこの創世記の記者が後の時代の地名で説明しているためと思われる。

[20-22]「ヤコブは誓願を立てた」これは13~15節で示された主の恵みの約束に対する応答であり、ヤコブの信仰告白とも言えることばである。「神がともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、無事に父の家に帰らせてくださるなら、主は私の神となり、石の柱として立てたこの石は神の家となります。私は、すべてあなたが私に下さる十分の一を必ずあなたに献げます」

石の柱が神の家となるというのは、そこが神礼拝の中心地となるということであろう。→士師記20:26~28 主がヤコブへの約束を果たしてくださる結果、そのようになるという彼自身の信仰告白である。

ヤコブは兄のエサウの受けるべき祝福をうそをついて横取りしたため、エサウからのちを狙われ、父の家にはおられなくなり、ついにはメソポタミアの母リベカの親もとへ妻をめとるためという名目で一時逃避することとなった。これはリベカの発案であったが、ヤコブの逃避行は短期間では終わらず、ついにヤコブは母と再会することができなくなるのである。そして、パダン・アラムまでの危険で孤独な旅において、主ご自身が夢の中で彼に現れて彼を励まし、アブラハム、イサクと受け継がれてきた祝福の契約を更新し、具体的な助けまでも約束してくださったのである。ヤコブは人間的に問題があり、さまざまな弱さを持つ人物であったが、そのような彼を主は彼が生まれる前から選んでくださり、祝福の契約を継ぐ者としてくださったのである。

私たちがヤコブに負けず劣らずさまざまな弱さや欠陥を持ち、そして罪深いものであるが、そんな者をも神はイエス・キリストにあって救おうと恵みのうちに定めてくださっ

た。このことを思う時、私たちはどれだけ感謝してもしきれない。私たちもこの主のすばらしい恵みを覚え、ヤコブが主に誓願を立てて主に従い続けたように、私たちもそれぞれの人生において主がみわざをなしてくださることを願い、祝福を与えてくださることを信じて、これからも共にいてくださり守り導いてくださる神に全面的により頼んで生きていく者になりたい。